

布を用いた製作活動を通してグローバルな資質の育成をめざす「技術・家庭」の学習開発

— モンの保育園に贈る「くるみボタンのおもちゃ」の製作から —

浦上千歳 ・ 柴 静子*

要約：本研究では、日本人の自国の伝統や文化を誇りにし、次世代への思いを表現させる「ものづくり」を通しての子どもの「多様性」「協働性」「主体性」を育成する効果的な学習を構築することを目的とした。そのために、子どもを対象として、日本と他国の違いや共通項を考えさせて、文化環境に恵まれていない地域で生活しているモン族の子どもに贈るくるみボタンを使った布おもちゃを製作し、現地の保育園に提案する学習活動を展開した。その結果、中学2年生の授業前後のアンケート調査や感想の分析から、「モン族の子どもたちに贈る布おもちゃの製作」という課題の解決を行う中で、「多様性」「協働性」「主体性」が育まれることが明らかとなった。

キーワード：くるみボタン、布おもちゃ、モン族、協働性、主体性

I. 問題の所在

平成元年の学習指導要領の改訂により、家庭科で環境教育が位置づけられた。その内容は、3R (Reduce・Reuse・Recycle) の How to の実践が中心であった。平成20年、中央教育審議会は、我が国の新しい教育の方向性として「競争」と「共存・協力」の2つの能力の必要性を示した。そして、その答申で、「世界や我が国社会が持続可能な発展を遂げるために協力しながら積極的に対応すべき課題」として環境問題を位置づけ直し、ESDの充実があげられている。家庭科では、ESDを、私たちの生活が、世界の経済・社会・環境などの諸側面や、過去の世代と将来とのつながりの中で成立していることを意識し、行動変革を促す教育ととらえている。従来の家庭科の学習では、「現在の私たちがより良い生活を営むための意志決定」を考えてきた。しかし、それを「世界や未来の人々のことも考えた上でのより良い生活を営むための意志決定」に変換していくことが、持続可能な社会を可能にする価値観と行動変革につながっていくと信清(2014)も述べている。

平成26年度に取り組んだ、タイの山岳地帯に住むモン族の子供たちに布絵本を贈るという授業実践は、他人との関係性、社会との関係性、自然環境との関係性を認識し、関わり、つながりを尊重できる個人を育むことを目

的としたものであった。結果、製作学習において、自分のためだけでなく、自分以外の誰かのためのものづくりが、世界や未来の人々のための意志決定につながり、行動の変革をもたらすことが明らかとなった。

そこで本年度は、ものづくりの過程において、「多様性」「協働性」「主体性」を育む課題解決場面の設定に焦点をあてて授業を開発し、他者・社会・自然環境とのかかわりを尊重し、さらに、世界や未来を考えた意志決定ができる子どもの育成を目指すこととした。

なお本研究において、「多様性」とは、自国および他国の伝統・文化の違いを知り、尊重できる力、「協働性」とは、様々な情報や意志、思想、態度をお互い尊重し合い、コミュニケーションできる力、「主体性」とは、自ら課題を判断し、解決に向けて選択・決定できる力と定義した。

II. 研究の目的と方法

本研究の目的は、日本人の自国の伝統や文化を誇りにし、次世代への思いを表現させる「ものづくり」における、子どもの「多様性」「協働性」「主体性」の変容を明らかにすることである。

具体的方法としては、私たちの生活に欠かすことのできない布の存在を、その歴史や世界との関わりを学ぶ中

* 広島大学大学院教育学研究科

で意識させ、日本と他国の幼児の比較により、人との関わりについて考えさせる。つまり「衣生活と自立」領域と「家族・家庭と子どもの成長」領域をコラボレートすることで、ものと人がつながる授業を設計した。また、授業を実践し、生徒のワークシートの記録やアンケート調査の結果から「多様性」「協働性」「主体性」の変容を把握することにした。

Ⅲ. 授業実践

1 対象生徒と授業者

本研究の対象は、広島大学附属東雲中学校2年生の2クラス（各クラス男子36名、女子43名）、計79名であり、授業者は浦上千歳であった。授業実施期間は、2015年7月～11月であり、次のように全8時間を配当した。

2 指導計画（全8時間）

- （第1次） これまで私たちは何を着てきたか・・・1時間
- （第2次） 世界の藍染めと日本の布・・・・・・1時間
- （第3次） 未来を担う子どもたち・・・・・・1時間
- （第4次） モンの子どもたちに笑顔を運ぶくるみボタンゲーム作り・・・・・・4時間
- （第5次） モン族の保育士さんに教材を提案しよう・・・・・・1時間

3 授業実践の概要

（1）第1次 これまで私たちは何を着てきたか

第1次では、天然繊維と化学繊維を取り上げた。天然繊維については、5種類（麻・綿・絹・絹・デニム）の布見本を各グループに準備し、その特徴とどんな製品に利用されているかを考えさせた。さらに布の特徴と関連づけながら、紀元前から天然繊維を身に付けてきた衣服の歴史の授業を実施した（柴，2013）。また化学繊維については、着用している衣服を振り返り、現在日常着のほとんどに化学繊維が使用されているが、その歴史は浅いことに触れた。繊維についていろいろな角度から学ぶことで、日常生活のあらゆる場面で自分たちが布とかかわっていることを改めて確認させることもねらった。

（2）第2次 布は世界をつなぐ

第2次は、日本の布の歴史の中で、長く庶民に愛された藍染めを扱った。藍染めが日本だけの文化ではなく、世界中で活用されてきたことを紹介し、その一例としてモン族のスカートの布を紹介した。また、布の模様にも

着目させ、日本の緋、小紋、インドの更紗、イギリスのリバティの柄を比較させて、それぞれの国で発展してきた布に関わる文化が、その交流によりお互いに影響していることを発見できるよう指導した。さらに、日本の中でも、各地でそれぞれに発展し、現在に残る日本の布をその名前から画像検索させた。

（3）第3次 未来を担う子どもたち

第3次では、モン族の生活を映像で紹介した後、先輩たちが製作した布絵本をモン族の保育園で現地の保育士によって読み聞かせされている映像及び先輩たちが保育実習で訪問し、絵本の読み聞かせ活動をしている様子の映像を視聴させた。加えて、モン族の生活環境を示す数枚の写真を配布し、日本とモン族の子どもの違いについて、「取り巻く環境」、「子どもの様子や表情」、「遊び」の3つの観点から読み取りを行わせた。

また、モン族に関わろうとしている人たちとして、NPOの活動や広島大学の学生の活動（新聞記事）を紹介し、この人たちをボランティア活動に駆り立てる思いとは何かについて考えさせた。

最後に、自分たちにもできることはないかという思いを引き出すために、モン族の子どもたちにとって必要なこと・ものについて、グループで話し合わせた。

（4）第4・5次 保育士さんから子どもたちへ ～布を使った教具を提案しよう～

班ごと（1班4人）に、モンの保育園児が喜んでくれるおもちゃの製作に取り組みさせた。おもちゃの計画・設計段階では、おもちゃを通して子どもたちに伝えたいことを明確にさせ、布でできたおもちゃの製作を行わせた。具体的には、手作りで簡単にできるくるみボタンを必ず使うことを条件として、布（古布、リバティ、更紗、インド綿、モン族の布）・フェルト・ひも・綿などを材料とし、針と糸を使って製作させた。

今回の製作品のコンセプトは、保育士へのおもちゃの提案である。よって、壊れても直せること、洗濯も可能であること、そして何より、現地で同じようなおもちゃが製作できることを条件とした。

おもちゃと一緒に、遊び方がわかるカードの製作（レシピカード）も行わせた。カードの表紙絵は、布の端切れを使用した貼り絵とした。この貼り絵も、現地の保育士さんへの布を使った遊び方のアプローチとなることを確認した。レシピの内容については、贈る相手が用いて

いる言語ではなく、どのような言語の相手にも理解できる内容となるように、遊び方の写真を使用するなどの工夫をさせた。

図1と図2は、生徒が製作した布のおもちゃとレシピカードの例である。



でんわ

変わり絵本



はめ絵

袋付きオセロ

図1 生徒が製作した布おもちゃ



端切れを使用しちぎり絵風に作った表紙絵



中身 (おもちゃの遊び方の説明)

図2 生徒が製作したレシピカード

IV. 結果と考察

1 アンケート調査からの考察

一連の授業の事前と事後で、調査を2回行った。

調査の実施日は、次の通りである。

<授業前のアンケート実施日>

2年1組Bグループ・2年2組Bグループ (計39人)

平成27年10月3日

2年1組Aグループ・2年2組Aグループ (計40人)

平成27年10月7日

<授業後のアンケート実施日>

全クラス 平成27年11月24日

<アンケート項目と集計方法>

アンケート項目については、表1を参照されたい。なお、表1では肯定的な反応から否定的な反応まで、1～5点を与えるようになっているが、集計の際には点数を逆転させて、5～1点を与えた。表2は、そのように数字を逆転させて、各項目の事前と事後の得点の平均値を示し、エクセル統計を使用して有意差検定(対応のある2群の母平均の差の検定)を行った結果を示したものである。

<考察>

本調査では、大問Ⅰとして、自分たちの生活に対する意識について問う質問を行った。大問Ⅱは、関心の高まりを主体性が育まれる第一歩ととらえて、発展途上国の人たちの生活と子どもたちの保育園での生活への関心について問うものとした。大問Ⅲとしては、解決に向けて選択・決定できる力や自ら積極的にコミュニケーションしようとする力をみることのできる質問とした。なお質問の内容は、事前・事後とも同じだが、事後のアンケートの問い方については、生徒が自身の変容について答えられるように語尾を変えた。

大問Ⅰより、今回の授業を終えて、自分の生活を豊かであると自覚している意識に有意な差が見られた。しかし周囲の人や他国の人と同程度であるという意識には有意な差は見られなかった。このことから、自分の生活が他国の人に比べて、いかに恵まれたものであるかという思いに変容したことがうかがえる。そのことは、生徒の授業後の感想にも多くみられた。

大問Ⅱでは、1～8のすべての項目において有意な差がみられた。このことから、発展途上国の人たちの生活と子どもたちの保育園での生活への関心が増し、普段の

表1 アンケート（授業前後に実施）

＜家庭科＞事後アンケート 11月

回答欄の○を鉛筆やボールペンなどで塗りつぶしてください。[可：●、●／ 不可：○、○、○、○]

学年	組	番号	氏名
----	---	----	----

I 「自分の生活について」の質問です。以下の項目について、当てはまると思う番号を選んで、マークしてください。

①:とてもそう思う ②:ややそう思う ③:どちらともいえない ④:あまりそう思わない ⑤:まったくそう思わない

- | | | |
|---|------------------------|---------------------|
| 1 | 自分は物の豊かな恵まれた生活をしていると思う | (1) (2) (3) (4) (5) |
| 2 | 周囲の人も自分と同程度の生活をしていると思う | (1) (2) (3) (4) (5) |
| 3 | 他国の人も自分と同程度の生活をしていると思う | (1) (2) (3) (4) (5) |

II 「発展途上国の人たちについて」の質問です。以下の項目について、当てはまると思う番号を選んで、マークしてください。

①:とても〇〇〇〇ある ②:やや〇〇〇〇ある ③:どちらともいえない ④:あまり〇〇〇〇ない ⑤:まったく〇〇〇〇ない

- | | | |
|---|--|---------------------|
| 1 | 発展途上国の人たちの生活について関心を持つようになった | (1) (2) (3) (4) (5) |
| 2 | 発展途上国の人たちの生活について、普段の生活の中で考えるようになった | (1) (2) (3) (4) (5) |
| 3 | 発展途上国の人たちの生活を知る必要がある | (1) (2) (3) (4) (5) |
| 4 | 発展途上国の人たちの生活は、自分たちの生活と関わりを感じるようになった | (1) (2) (3) (4) (5) |
| 5 | 発展途上国の子どもたちが保育園でどのように育てられているのかについて、関心を持つようになった | (1) (2) (3) (4) (5) |
| 6 | 発展途上国の子どもたちが保育園でどのように育てられているのかについて、普段の生活の中で考えるようになった | (1) (2) (3) (4) (5) |
| 7 | 発展途上国の子どもたちが保育園でどのように育てられているのかについて、知る必要がある | (1) (2) (3) (4) (5) |
| 8 | 発展途上国の子どもたちが保育園でどのように育てられているのか、自分たちの生活と関わりを感じるようになった | (1) (2) (3) (4) (5) |

III 以下の項目について、当てはまると思う番号を選んで、マークしてください。ただし4については、下の空欄に記述してください。

①:とても〇〇〇〇ある ②:やや〇〇〇〇ある ③:どちらともいえない ④:あまり〇〇〇〇ない ⑤:まったく〇〇〇〇ない

- | | | |
|---|--|---------------------|
| 1 | 発展途上国の子どもたちに対して、自分たちに何かできることはないかと考えるようになった | (1) (2) (3) (4) (5) |
| 2 | 発展途上国の子どもたちに対して、何か行動したいと思う | (1) (2) (3) (4) (5) |
| 3 | 発展途上国の子どもたちに対して、何かできることがあると考えるようになった | (1) (2) (3) (4) (5) |

IV 世界中の未来の子どもたちを幸せにするために、一番必要なことは、何だと思いますか。あなたの思いを書いてください。

--

生活の中で、見るもの聞くものに対する視点が広がったことが明らかになった。特に、発展途上国の生活や子どもの保育について知ることの必要性を聞いた大問Ⅱの3と大問Ⅱの7の結果については、(とてもそう思う)(ややそう思う)を合わせた割合が、事前ではそれぞれ31%と3%であったところが、事後では、89%と75%と飛躍的に伸びている。このことは、自国および他国の伝統・文化の違いを尊重しようとする力が育っていると言えるであろう。これは本研究において育てたい力の1つとしてあげた多様性に関わる生徒の変容ととらえることができる。

表2 事前と事後の得点平均値と有意差

	事前 平均値	事後 平均値	有意差	危険率
質問 I-1	4.34	4.53	有	5%
I-2	4.07	4.09	無	—
I-3	2.23	2.44	無	—
質問 II-1	3.44	4.27	有	1%
II-2	2.40	3.86	有	1%
II-3	2.91	4.43	有	1%
II-4	3.25	3.70	有	1%
II-5	2.97	3.88	有	1%
II-6	1.91	3.36	有	1%
II-7	1.65	4.03	有	1%
II-8	2.66	3.60	有	1%
質問 III-1	3.62	4.27	有	1%
III-2	2.75	4.22	有	1%
III-3	4.12	4.18	無	—

(対象者：77人)

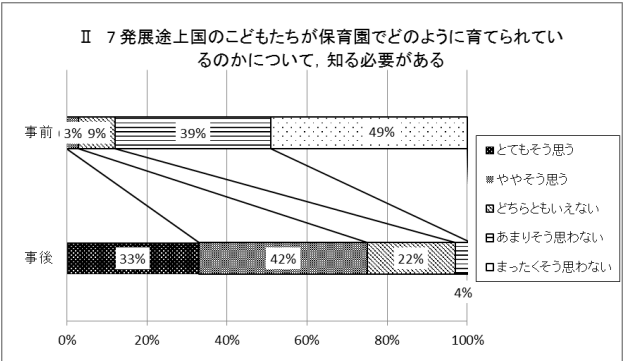


図3 問Ⅱの3 事前と事後の比較

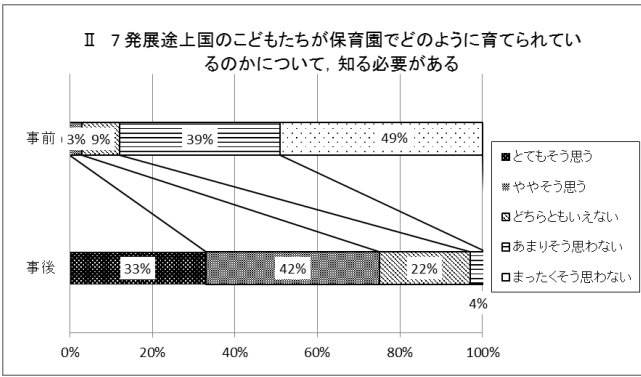


図4 問Ⅱの7 事前と事後の比較

大問Ⅲでは、1と2の2つの項目において、有意な差がみられた。このことから、実際に相手のことを考えながらもものづくりを行う中で、自分との関係性に気づき、自分たちにもできることがあることを実感して、さらに相手を知りたい、自らコミュニケーションをとりたいという意識が生まれたと考えられる。今回の研究で目指した協働性は、グループでものづくりする中での仲間同士でコミュニケーションできる力を想定していたが、今回の授業では、もっとグローバルな枠での協働性の高まりを実感することができた。

2 生徒作品と授業後の感想からの考察

グループによりおもちゃに必要なくみボタンの数に偏りはあったが、どこの班のおもちゃも各所に工夫が見られ、その製作に熱心に取り組んでいた。例えば、「2年1組Bグループ」の各班が取り組んだおもちゃ製作のテーマと概要は表3のとおりである。

表3 各班のおもちゃのテーマと概要
(2年1組Bグループ)

<おもちゃのテーマ>	<概要>
・数字の魅力	数字の入ったボタンで、布カードで示された数をつくる
・柄あわせの楽しみ	ボタンの柄を使った神経衰弱
・遊びながら想像力	絵柄に合わせてボタンをはめるを養う
・バランス感覚	積みボタン
・考える楽しさ	オセロゲーム

授業後の感想を分析すると、79人中34人に、製作活動中にモン族の子どもたちを思って、よりよい作品にするために、班内で悩み、意見交換した様子が書かれていた。

また、授業後の感想文において「これからも機会があれば何かボランティアしたい」「他にも自分ができることを探そう」など、今回の学習で得た情報や知識をこれからの活動に関連づけようとしている内容のものが79人中26人の文章中に見られた（表4）。

これらのことから、送る相手となるモン族の子どもたちのいろいろな情報を元に、モン族の子どもたちにとってよりよいおもちゃを考え、製作する過程は、生徒の「協働性」を育む製作活動になったといえる。

表4 生徒の授業後の感想から（班活動について）

・どうすればモン族の子どもたちに喜んでもらえて楽しんでもらえるおもちゃになるかを考えるのは難しかった。

・製作している時、「ここはこうした方が持ちやすい」とか「柔らかい方がいいんじゃない？」など、モン族の子どもをのことを思った意見がたくさん出た。

・おもちゃ作りを班でやることによって、できあがった時の達成感がより味わえた気がする。

・ここはこうした方がわかりやすい、使いやすいなど、話し合いながら、作業工程の中で工夫を組み込んだりすることができた。

さらに大問IVでは、「世界中の未来の子どもたちを幸せにするために、一番必要なことは、何だと思いますか」という問いを設定し、記述式で回答させた。これを、テキスト・マイニング（無料ツール）で、出現頻度を分析したところ、表5に示した結果が得られた。

表5の名詞に関する出現頻度比較から、学習前には、世界のこどもたちの未来に向けて考える際の視点や意識が、実態のつかみにくい世界や平和などの小さくくりのものとして存在していたが、学習後には、環境・教育・子ども・学校など具体的なものに変容していることがわかった。

また、表5の動詞に見られる「なくす」は、“戦争をなくす”“争いをなくす”という意味に使われていた。「できる」は、“自分たちができること”“今何ができるのか”“夢を持って生活できる社会”などの文章中に使われていた。「あげる」は、“何かをしてあげる”とか、“やらせてあげて”などに、使われていた。

このように動詞に関する結果から、自分たちが行動すべき方向において、悪いものを消す方向の行動から良い

物を作り出す、生み出す方向に変容していることが示された。これらの変容は、主体性の高まりとみることができる。

表5 テキスト・マイニングによる言語分析の結果

名詞		動詞	
<事前>	<事後>	<事前>	<事後>
世界 10	環境 13	なくす 7	できる 10
平和 9	教育 11	考える 6	あげる 5
募金 8	お金 6	助ける 4	学ぶ 3
戦争 7	子ども 6		
生活 6	学校 5		
お金 6	場所 5		
子ども 6	知識 5		
協力 5			

※数字は出現頻度

以上のように今回の授業実践を検証した結果、日本人として自国の伝統や文化を学ぶと同時に、子どもたちという共通項において、発展途上国の子どもや文化について学び、次世代への思いを表現させる「ものづくり」を行うことで、「多様性」「協働性」「主体性」を育むことが可能になることが明らかとなった。

V. おわりに

今回の研究では、昨年度の研究で明らかになった「相手を意識したものづくり」の有用性を生かしつつ、本年度の研究の柱となる「多様性」「協働性」「主体性」を育むために、課題解決場面の難易度を上げた授業を構成した。昨年度に製作させた布絵本に比べて、自由度が上がった分、生徒にとっては難しい課題となった。今年度の対象学年も2年生としたので、まだ、「子どもの成長」に関する学習は行っていないにもかかわらず、その作品を見ても、子どもに対する細かい配慮や工夫が見られた。

さらにいえば、今回の生徒たちの製作意欲を向上させる大きな要因となったのは、先輩たちの活動である。先輩たちが製作した布絵本がモン族の保育園で読み聞かせされている映像を視聴した時、そこに自分たちが製作したおもちゃを重ねてみたに違いない。そのことは、生徒の授業後の感想の中からもわかる。モン族の子どもたちが製作したおもちゃを喜んで受け入れてくれるのかどう

か、楽しみにしている思いや、逆に不安な思いなどが様々に綴られていた。

今回の研究をする中で、私どもが目指す「世界や未来を考えた意思決定ができる力」をつけるための教材は、家庭科教育の中には多数存在するのではないかと改めて気づかされた。この度は、「衣生活と自立」と「家族・家庭と子どもの成長」の領域をまたぐ構成としたが、領域の枠にとらわれず、「生活」や「人」という文脈で結ぶことで、持続可能な社会を可能にする価値観を生徒に啓蒙する授業を構成することができるのではないかと考えている。

引用・参考文献

柴静子：染織の日本の発見を主題とした衣生活学習を支援する調査と内外資料の収集，広島大学大学院教育学研究科紀要第二部第 62 巻 311-312，2013。

浦上千歳，柴静子：生活文化力を培う家庭科の授業づくり—伝統・文化の視点を取り入れた授業を通して—，広島大学附属東雲中学校研究紀要第 44 集 88-94，2012。

浦上千歳，柴静子：生活文化力を培う家庭科の授業づくり (2)—モン族の子どもたちに贈るジャパン・ブルーの絵本バッグの製作を通して—，広島大学附属東雲中学校研究紀要第 45 集 89-95，2013。

浦上千歳，柴静子：子どもたちに贈る布絵本の製作を通してグローバルな資質の育成をめざす「技術・家庭」の授業開発，広島大学附属東雲中学校研究紀要第 46 集 79-86，2014。

田村学：授業を磨く，東洋館出版社

お茶の水女子大学子ども発達教育研究センター：幼児教育ハンドブックお茶の水女子大学子ども発達教育研究センター編（日本語版）．2004．pp. 197-212。

佐伯昭夫氏提供の映像・写真資料：昨年の生徒が製作した絵本をモン族の保育園の園児に寄贈していただいたが、その際のビデオ映像及び写真を参考にした。

地球アゴラ「安井清子・モンの子どもへの絵本」NHKBS1 2008. 11. 16 放映。

謝辞

今回製作した生徒の作品は、シャンティ山口の佐伯昭夫氏によってモン族の保育園に届けられる予定です。園児の様子なども撮影をしてくださるとのことなので、帰国後になりますが、生徒に映像を見させて、モン族の子どもたちおよび現地の保育士がくるみボタンの布おもちゃをどのように喜んで受け入れたのかを知らせることができます。佐伯様には格別のご協力をいただき、深く感謝しています。

Developing lessons in industrial art and home economics to foster global awareness by making toys using buttons and cloths for Hmong's Children.

Chitose URAGAMI and Shizuko SHIBA

Abstract. This study aimed to develop effective lessons to raise cultural awareness as well as a spirit of both cooperation and independence in junior high school students in home economics classes through learning to make toys for other children. In this course, it was expected that the students would learn to express their thoughts to the next generation as well as understanding and taking pride in Japanese tradition and culture. The goal of the lessons was to make toys using buttons and cloth to send to Hmong children, who live in culturally underprivileged areas. Toward this goal, eight hourly lessons were undertaken by eighth graders in Thailand. At the end of the course, the students completed questionnaires and provided written descriptions of their experience. From this, it was evident that the course helped stimulate the students' thinking and contributed to a spirit of both cooperation and independence.

Key words: buttons and cloth, toys made from cloth, Hmong, cooperation and independence